

## コリヤサ踊り

私が ナーイノヤ..

「アリヤリヤンリヤン、チョイトソーリヤ」

ハアー音頭でなけれども

「ハアー、コリヤサノサッサ」

今取るお方の声沐ませに

「ヨイヤナー、ヨイトサー」

何にかナーイノヤ

ハアー一言 読み上げる

それだからとて 皆様方よ

何にもナーイノヤ

ハアー文句は 上手でないが

皆様方の囃子にのせて

後のナーイノヤ

ハアー先生の見えるまで

桜田騒動と題します

古きナーイノヤ

ハアー昔の 事なれば

私が見て来て 読むでなし

作者ナーイノヤ

ハアー作者の 筆のあと

作者と落ちどは 無いけれど

落ちどナーイノヤ

ハアーがちなる 私が

飛び飛び覚えた あらまして

サアサナーイノヤ

ハアー踊りは 囃子が大事

囃子が良ければ 音頭も勇む

ヨイヤサーナーイノヤ

ハアーヨイトナと囃子を頼む

お手々が揃えば 文句にかかる

今もナーイノヤ

ハアー昔も忠義の道を

尽すサ その名は末世の鑑

頃はナーイノヤ

ハアー何時よと 尋ねたならば

頃はサ 万永元年なるが

水戸のナーイノヤ

ハアー浪士 十八人が

花のサ お江戸のあの桜田で

弥生ナーイノヤ

ハアー3日に降る 日雪は

積るサ 怨みを晴らせし次第

元のナーイノヤ

ハアー起りを尋ねたならば

過ぎしサ 嘉永六年よりも

通るさナーイノヤ

ハアーアメリカ合衆国の

玉のサ 使いが我が日の本へ

願うナーイノヤ

ハアー貿易 たび重なれば

時のサ老中 伊達内藤や

聞部にナーイノヤ

ハアー有田と堀田を初め

続くサ 老中若年寄りが

ごだいナーイトヤ

ハアー老なる 指図によりて

異国サ貿易 許すと言え.ば

それとナーイノヤ

ハアー聞くより 水戸様こそは

時ぞサ 日本の副将軍よ

昔かしナーイノヤ

ハアー東将 権現様の

御遺言にサ 異国の者は

国にナーイノヤ

ハアー上げては 日本のすさび

早くサ 異国を打ち払らわんと

寺院ナーイノヤ

ハアー釣鐘 半鐘までも

上にサ引上げ 大砲作り

目々のナーイノヤ

ハアー練習 整いまして

戦サ用意も 充分なれば

お殿ナーイノヤ

ハア一様之と お願い致す

それとサ聞くより 井伊様こモは

水戸をナーイノヤ

ハア一そのまま 捨て置く時は

とてもサ思いは 届かんものと

どうかナーイノヤ

ハア一おしこめ 我が一考で

異国サ貿易 許さんものと

上にナーイノヤ

ハア一ざんげん いたし

戦サ用意は 謀ホソのもとと

あわれナーイヤ

ハア一なるかや 水戸様こそは

すでにサ 安政2年の冬に

国にナーイノヤ

ハア一ぢきょうの 身分となりて

元がサ強気の お気質なれば

日々にナーイノヤ

ハア一無念の 心労なさる

それ.とサ 知るより御家中方が

しのびナーイノヤ

ハア一忍んで 相談いたし

かくてサ勇士は どなたと聞けば

有田ナーイノヤ

ハア一清エ門 佐野竹之助

広木松造 杉山 弥一

稲田ナーイノヤ

ハア一十内 広岡 四郎

斉藤 監物 大関 和七

岡部ナーイノヤ

ハア一新吉 山口 新吾

増子清兵衛 恋淵 要

後にナーイノヤ

ハア一続いて 森橋 三郎

森屋五郎蔵 関 新之助

蓮田ナーイノヤ

ハア一市兵衛 黒沢 忠助

開道 覽持 剣道 指南

このやナーイノヤ

ハア一同じく 十八人が

坊主サ 山伏 古金買や

又はナーイノヤ

ハア一飴売り 甘酒売りに

姿サやつして 東に上ぼる

此処かナーイノヤ

ハア一彼処か 伺いけれど

さすがサ天下の 大老職よ

日々のナーイノヤ

ハア一登城も おん供多く

うかとサ手出しも 出来かたければ

無念ナーイノヤ

ハア一無念で過ぎ行く月日

さてもサ御運の つきたる時か

弥彦ナーイノヤ

ハア一三月三旦と なれば

さてもサ英主 彦恨の城主

其のやナーイノヤ

ハア一 おん高 三十五万石

弥生サ 三月三日の日には

お城のナーイノヤ

ハア一師句の 御登城かけて

折もサ 折りから降る白雪に

おん供ナーイノヤ

ハア一まわりは 皆袖合羽

下にサ下にのせ 其の声高く

殿のナーイノヤ

ハア一お駕籠は 桜田指して

其れとサ見るより 甘酒売りが

かねてナーイノヤ

ハア一合図の 口笛呼けば

かくてサ覚悟の同志の者が

さてもナーイノヤ

ハア一此の先 読みにいけれど

此こらサあにりで 段切りまする